保育奉公

大東亞戰爭必勝完遂

青葉の朝

倉橋惣三

園はすがゝしい青葉になつた。木といふ木は若葉の新綠に映へ、わけても、灌木叢が、勢のいゝ新芽に、むくゝと盛りあがつてゐる。生々潑剌、全園が旺勢なる自然の力の漲りである。

開園時刻よりも早く出勤して、子らの登園を待ち受けるのは、日頃からのことであるが、近頃は特にそれが早くなつた。若い感覺が、この五月の朝に惹きつけられるのでもあるが、一層深くは、子らをしつかり護らなければならない今日の責任感が、一人の子をも、先生の居ない園に置いておけないからである。と同時に、もつと細かく自分を分解してみれば、今日の、ぢつとしてゐられない皇國女性としての感情の、すき間なき充實と、たるみなき緊張とに生ぎずにゐられないからである。

保育に生きる自分である。こうして毎日、一心に、眞劍な保育奉公につくしてゐる自分である。殊に、その自覺が專ら純に、一段と大きい今日の自分である。もう一つほどいて言へば、今日ほど、皇國の幼兒を差別なく一人のこらず、ほんとうに保育することの重要さを、胸一ぱいに感じたことがないといつてもいゝ自分である。

一人の先生は、さつきから庭を掃いてゐる。あとからゝ箒目にしつとりとした土の香が、庭中にひろがるやうである。一人の先生は、かいがゝしく窓硝子を拭いてゐる。一枚々々すき透る玻璃面にさす青い朝の日光が、室内をくつきりと明るくしてゆくやうである。そこへ、子どもが一人來た。二人來た。三人來た。先生の前に飛びつくやうに駈けて來て、「先生、お早うございます」といつては、またはねかへるように飛んでゆく。なんといふぴちゝした足どりだ。なんといふきりつとした姿だ。戰時下、幼兒も元氣が加はつてゐる。

かうして全國にぐんぐんと溢れかへつて來る戰時下幼兒達の逞しいどよめきは、先生達の心を、保姆でなければ分らない「柔い强力」にひしゝと盛りあがらせてゆく。今しも同じく「柔い强力」に盛り上つてゐる五月の天地と共に。

（戰時幼稚園小景　五）